日中
おかやま
題字故原田 親
No. 592
2009/12/15
日中友好新聞
発行所
日本中国友好協会
〒113-0033 東京都千代田区
西神田3-4-1 東方学会ビル3階
日中友好協会
岡山支部
〒703-8256
岡山市浜3-8-30 511
TEL/FAX086(272)-3010
郵便振替口座
01250-0-3835
日中友好協会
倉敷支部
〒712-8014
倉敷市連島中央4-8-4
(宮地方)
TEL・FAX(086)446-2711

日中友好協会岡山支部主催
第34回中国料理教室
＝12月6日に岡山市高島公民館で開催＝

今回は蘇州の家庭料理3品を作りました。参加者は19名(小学生4名)でした。

講師の黄さんは中国江蘇省蘇州の出身です。「鶏胸肉と生ピーナッツを使った料理やナスを油で素揚げにした料理は、私の国:蘇州の母の味です。ナス料理の『魚香茄子』は魚という字がありますが魚は使いません。」と自己紹介。

講師を引き受けるに当たって何度も家で練習をした」と事前に黄さんにお聞きしていたので本当は心配していましたが、これは謙遜でした。

黄さんは、岡山大学へ留学。今は専業主婦だそうです。来日7年目の流暢な日本語でレシピの説明は勿論、適切なアドバイスを料理の区切り毎に説明、その上、料理の手際も良く、各テーブルにも目が行き届き、家事をしっかりなさっていることが伺えました。

そして試食時には、中国料理は油をふんだんに使うけれども太らないのは何故かとか蘇州観光地のこと、水の都蘇州の今と昔や中学生の頃の受験勉強の話などをしてくださり、上海蟹の質問には 高いから食べたことはない」とすました笑顔で答えられたのが印象的でした。

また感想を述べ合う中では、「年に1度では少ない。2～3回は料理教室を」と励まされ(?)中国料理教室担当としては、嬉しいやらプレッシャーやら・・・の半日でした。

(中国料理担当:西森文子)

魚香茄子

宮保鶏丁

子どもたちに、平和を！
平和を守る母親行動に参加して

貝吹佳代子

子どもたちに、平和を！

12月8日、岡山県母親連絡会による「12・8 平和を守る母親行動」が表町の天満屋・アリスの広場前で行われました。

日中友好協会からも、小林軍治事務局長、西森文子さん、私の3名が参加して、実物大の赤紙『召集令状』が印刷されたビラを配りました。

資料館などで赤紙を見たことはありましたが手に取って見たのは初めてだったので、この紙1枚で大切な人が戦場へとかり出されたのかと思うといたたまれない気持ちになりました。

初めてのビラ配りで、少し不安もありましたが「ご苦労様です。」と言って受け取ってくださる方や、ポケットから手も出そうとしない人、避けるように通り過ぎてゆく年配の人・・・。ふと、私だったらどうするだろう。」と思いながら活動を終えました。

ただ、びっくりしたのは期末試験の時期なのか学生が多く、「今日は真珠湾を奇襲した日で、これが赤紙よ。」と言うと「え～」と言って素直に受け取ってくれた男子学生や、友達と一緒に署名をしていた学生が意外と多いのに驚きました。1時間ほどの母親行動でしたが、初めての体験でしたので「12月8日」は私にとっても忘れる事のできない日になりそうです。

日中友好協会岡山支部　太極拳講習会

孫たちと秋を満喫したみかん狩り

日中友好協会岡山支部太極拳では、毎週の練習と夏のビアガーデン、新年会、みかん狩りなど楽しい催しがあります。11月下旬～12月初旬にかけて企画される「山本農園のみかん狩り」はおいしいみかんと新鮮な魚中心の昼食がメインの楽しい行事です。今年は11月29日にみかん狩りに行きました。

今回は娘夫婦、6歳と3歳の孫も一緒に参加。 当日は、お天気もおだやかで風もなく、日生港から5分で鹿久居島到着。大人12人、小学生未満4人。全員自己紹介ののち、みかん山へ。山本農園のみかんは無農薬、ノーワックスで安心して食べることができます。6歳の孫もみかんのもぎ方を習い、いさんでみかん狩りを始めました。みかん山から正面を眺めると紅葉の最中で身もこころも洗われる思いでした。

山でもいだみかんは、少し甘酸っぱく最高の味です。

みかん狩りの後は、楽しい昼食ですが、新鮮な鯛の煮付けは身がはじけ、穴子や天ぷら、山の幸もおいしく目の前のごちそうに舌鼓をうち、1時間程でおなかいっぱい。残ったおかずは、みんなで分け合い夕飯の足しにするのも恒例です。

午後からは、広場で太極拳を楽しむ人、散歩する人、オカリナを奏でる人、ゆっくり休む人などなど心いくまで晩秋の午後を楽しみました。

山本農園のみかんは、津島の岡大近くにある自然食品を扱っているお店にいけば買うことができるそうです。参加者全員事故なく日生港につきました。来年も参加できるよう、練習にはげみたいと思います。

今回は参加できなくて残念だった皆さん、来年は参加できるといいですね。

2009年12月1日

小坂　依子

日中友好協会岡山支部ホームページ
http://rizhong.web.infoseek.co.jp
メールアドレス
rizhong86@hotmail.co.jp

第80回日中文化講座

「いまの中国をどう見るか－映画・漫画を通して－」

石子順氏　講演　⑨

第80回文化講座（09・5・16）での石子順さんのお話を掲載しています。

中国の文化大革命で一番被害にあったのが文化面で、なかでも大きな被害にあったのが映画と漫画界なんですね。もちろん文学も美術も音楽も、教育とかいろんな面でも文化大革命というのは、徹底的に破壊しましたけれど、文化大革命の始まりで一番集中攻撃を受けたのは、映画監督とか映画スターとか映画脚本家、それと漫画家なんですね。彼らは全部仕事を失って、捕らえられて、検査を受けて、反革命分子だとか国民党のスパイだとか色んなレッテルを貼られて、投獄された人もいるし、中には自殺した人もいる。ほんとに映画界というのはめちゃめちゃに破壊されていったわけです。

それは何故かと言うと、毛沢東夫人の江青という女性がいますが、この人は1930年代の映画女優だったんですね。映画女優で売れなかったんですが、スキャンダルなどが一杯あって、そういう面では随分評判になった人らしいです。

1937年、上海が日本軍に占領される直前に、大勢の映画人たちは皆、南京、重慶めざして撤退していったんだけれども、江青だけは何故か北に向かっていったんです。北に向かって何処へ行ったかというと、延安を目指すんですね。西安経由で延安を目指し、延安にうまく入って毛沢東に近づいて、毛沢東の奥さんになってしまったという転身ぶりをみせたわけです。でも、毛沢東の結婚は当時、幹部クラスは皆反対でね。上海から来た得体の知れない人間となぜ毛沢東は結婚するのかと、随分反対があったらしいんだけども、周恩来が仲をとりもって、江青女子は結婚しても政治には一切口を出さない。毛沢東の秘書として毛沢東の生活を見る」という条件で結婚を許されるんです。

でも、戦争が終って中華人民共和国が出来て、それまで江青女子は毛沢東夫人であるということだけで、発言してなかったんですが、1950年代になってから毛沢東に映画界のことを色々と注進して、色んな映画批判運動がその後起こるんです。その影の仕掛けをやったのが江青女子で、文化大革命が起こる直前に、色んな映画が作られましたが、それらの映画が全部、労働者・農民・兵隊のための映画ではないという言い方をして、ブルジョア映画であるとか、右派的な映画であるとか、国民党的な映画であるとかレッテルを貼って、大批判を展開するんですね。その勢いで、文化大革命が毛沢東によって発動された時に映画界がやり玉にあがったんです。

映画界のあの俳優もこの有名な映画監督もみんな、反革命分子だなんていうとそれだけでもショッキングですよね。

つづく

樹高千丈、落葉帰根　ということ

「遥かなる絆」の原作者

城戸さん親娘のトークを聞いて

井上進夫

控室で話し合う　城戸親子と高杉夫妻

親娘トークが始まる前に、高杉久治さんと一緒に幹さんの楽屋を訪ねた。同じ時期、同じ年頃で中国に取り残され孤児となった二人はすぐに打ち解けた。他のたくさんの来訪者が口を挟めないほど話が弾んだ。果たして彼らの幼児期から青春の時代を過ごした時間を語るのには中国語が必要だった。ふたりの豊かな表情で語り合う姿を見ながら、その中国語の裏にある彼らの人生を思い、わたしは切なかった。

城戸幹さんは、トークの冒頭「私にも不幸な人生がありました。しかし私と同じように、いやそれ以上に不幸な人生を送られた多くの人たちがおられます。」と、あの戦争で悲惨な体験をさせられたのは自分だけではなく、被害を受けた多くの人たちのことにも思いを馳せておられた。

私は今日のトークを聞きながら、このような人生を余儀なくさせた戦争の不条理さを改めて思い、決してその過ちを繰り返さないために日々の生活の中で、自分なりにできることをしていこうと思った。

娘が問う「どんなお母さんだったですか？」

父が答える「それは優しかったよ。愛情を持って育ててくれた。無償の愛とはこんなことをいうのではないだろうか…。」

嗚咽で言葉が続かない。

そんな父に娘は続けて問う「そんなに大切に育ててくれたお母さんを置いて、なぜ日本に帰ってきたの？」

父は少し間を置いてつぶやくように言う「樹高千丈、落葉帰根という言葉が中国にはある。母もわたしもそんな気持ちだったのだよ。」

娘の久枝さんは、自分はもう十分に理解しているのだが、会場にいる我々に伝えるために、あえてその質問をしたのだと思う。帰国した中国残留孤児たちがいままで陰に陽に浴びてきた「利己的」「恩知らず」という言葉に答えるために。

先日、山陽新聞社さん太ホールで、「城戸幹さん、城戸久枝さん親娘トーク」を聞いた。

幹さんは3歳の時、中国で孤児となりその後養母たちに「わが子」のように育てられる。学力優秀な青年に育った孫玉福(幹さんの中国名)は中国でも最難関といわれる大学受験に臨む。しかしその願書の民族欄に日本と記入したことが政治審査にかかり不合格となり、その後の人生は暗転する。彼は自分が日本人であること以外に、日本語も、日本の両親のことも、そして日本がどんな国なのかも全く知らないのであるから、願書に漢族とか少数民族の名前でも書いてさえいれば、前途は洋々としたものであったに違いない。しかしその道を彼は選ばなかった。

なぜか。彼はその理由を樹高千丈、落葉帰根という古い中国の成語で表現したのだ。

どんなに大きく立派に育った木(樹高千丈)でも、その木に繁っていた葉は最後にはその根元に帰っていく(落葉帰根)ものだ。自分は孫玉福という中国人として今まで生活して来たけれども、帰るべきところは日本である、という日本人としての存在証明を確認することを彼は選んだのだ。そして養母も「息子」の思いを知って帰根を許したのだ。幹さんが「無償の愛」と言ったのはそのことだった。

わたしは話を聞きながら、幹さんと養母のことをそのように理解した。

次回の新聞発送作業は
12月25日(金)午後1時半～
民主会館2階で行います。
前回お手伝いくださった方です。

吹和　袈
貝林　内垣
小内　内
竹竹　竹
竹三　